

おいでん・さんそんSHOW

10月号
2020.10.01発行



今だから注目したい、8年続く人と人とのつながり 小原地区・岩下町での集落応援隊活動



9月19日(土)に行われた岩下町での活動に参加した集落応援隊と地元の方たち

小原地区・岩下町での活動は、2013年のセンター設立当初にこの事業の第一号としてスタートしました。岩下町が応援隊の受入れを決めたのは、2012年に住民が地域の将来

住民の合意で受入を決めた岩下町

小原地区・岩下町での活動は、2013年のセンター設立当初にこの事業の第一号としてスタートしました。岩下町が応援隊の受入れを決めたのは、2012年に住民が地域の将来



以来、岩下町では毎年6月と9月の環境美化活動を集落応援隊の力を借りて実施しています。活動の休憩時間や作業後は隊員の方と積極的な交流があり、時には日頃の感謝を込めて集落のお母さん方が手料理を振舞ってくれることもあります。

この事業では、小規模化や高齢化が進み、住民だけでなく共同作業が困難となった集落と、集落の人たちと交流しながら地域活動を応援するボランティアをマッチングしています。年間6集落8回ほどの集落活動に応援隊を派遣。現在25名のボランティア登録があり、集落の要請に応じ毎回5名ほどの隊員が有志で参加しています。

集落とボランティアをマッチング

「しきしま・ときめきプラン」について考える「集落ビジョン」のワークショップがきっかけでした。当時、町内の世帯数は10戸、高齢化率75%ほどで、担い手不足が喫緊の課題でした。そこで集落の課題と現状を整理し、今後取り組む内容を住民同士で話し合ったところ、都市部市民と協同で地域の景観保全を行なっていくことが合意されました。

2020年全国過疎地域自立活性化優良事例表彰において最高賞の総務大臣賞に旭地区敷島自治区の受賞が決定した。総務局長が「創意工夫を持って過疎地域の活性化

民の発意からしきしま・ときめきプラン」を策定。定住対策を柱とする同プランは、5年ごとに見直される。自治区組織はプランの実現のための組織に再編された。10年間のUターン者は、目標の2倍に当たる40世帯98人。移住者を中心とする相次ぐスモールビジネス起業や年間延べ5000人に及ぶ住民主体の交流人口づくりなど、ミライに向けた明るい空気が評価されたものと思う。

進化続ける敷島自治区

センター長のミライのフツーンに
向かって！
センター長 鈴木辰吉

私自身プランの策定に関わり10年にわたる自治区の取組を見つめてきた。受賞が、目標の達成に向けた「死に物狂い」の努力の結果かといえ、そうでもない。皆で決めた事業に肅々と取り組み、問題があれば軌道修正し、自分たちでできないことは専門家や都市住民に頼るという作業は、楽しくすらあったように思う。過疎を社会と行政のせいにならず、自分たちで決めたことを自分たちでやっただけ過ぎない。

「しきしま・ときめきプラン」2020」は、さらに進化している。人口減少を避けられないものとして正面から受け止め、地域課題の住民の支え合いによる解決「コミュニティの再編」などを重点プロジェクトとして取り組む。戦後70年にわたる拡大と成長の時代にスタンダードとされた経済効率優先、自治のあり方そのものを問い直す挑戦だ。この度の受賞が果敢な挑戦を後押しするだろう。

イベント情報

「山村地域在住職員」の採用試験を実施

新型コロナウイルスの影響で社会のニーズや価値観が大きく変化するなか、豊田市は、アフターコロナ期を見据えて、本市の地域資源である豊かな自然等を生かした新たなライフスタイルについて、市内外に幅広く提案・提供することを目指し、「採用時から山村地域に居住できる人」を受験資格とする「山村地域在住職員」の採用試験を実施します。

【提案する新たなライフスタイル】

- ＊豊かな自然とともにある「居心地のよさ」を重視するライフスタイル
- ＊自分らしく、家族らしく「おうち時間」を大切にできるライフスタイル
- ＊リモートワークなど「デジタル」でつながるライフスタイル

- 申込期間 | 2020年10月1日(木)～21日(水) 消印有効
- 募集職種 | 行政職事務
- 募集人数 | 5人程度
- 主な受験資格 |
 - ＊採用時から市内山村地域(旭、足助、稲武、小原、下山)に居住可能な人
 - ＊昭和36年4月2日以降に生まれた人
 - ＊学歴や職務経験は不問
- 申込方法 | 指定様式の「受験申込書」及び「自己PRシート」を豊田市総務部人事課へ郵送※募集要項及び様式は、10月1日(木)から人事課窓口等で配布します(市ホームページからのダウンロードも可能)。
- その他 | 採用試験に関する詳細は、募集要項をご参照ください。
- 問合せ | 豊田市役所総務部人事課 〒471-8501豊田市西町3-60(豊田市役所南庁舎3階) TEL:0565-34-6609 FAX:0565-34-6815



「中山間地域在住職員(※)」が取材を担当した冊子があります！

豊田市では平成27年に中山間地域在住職員の募集を行い、平成28年4月から6名が従事しています。おいでん・さんそんセンターは、平成30年度に移住プロモーション冊子「脈々と」を作成。中山間地域在住職員の6名が移住者の視点で、田舎の生き物、伝統文化、伝説、食など豊田市の魅力や意外な一面を地域住民や地域資源の取材を通じてまとめた記事を掲載しています。冊子は、センター事務所で配布している他、ホームページでも全ページダウンロードが可能です(トップページから「脈々と」で検索)。今回の採用試験に興味のある方は是非、ご覧ください。

(※)平成27年当時と今回の募集で、呼称が変更されています。



岩下町の現在の世帯数は9戸。徐々に少なくなっています。が、住民から地域を諦める声は全く聞こえません。いつまでも地域が守られていくよう、これからも応援を続けていきたいと思えます。(坂部友隆)

しね。気分転換や健康維持になるので都合が合うときは参加しています」と、活動への参加動機を話します。

一方、応援隊を受け入れる岩下町・町内会長の久木良夫さん(70歳)は、「今年応援隊の方が来ていただけなければ活動を中止しようと思っていました」と、応援隊を頼りにする思いを語っていました。また、草刈作業を終えると「みんな年寄りばかりでやれる人が少なくなってきたので、本当にありがたいです」と、明るい笑顔で挨拶されました。

イベント情報

第9回いなかとまちの文化祭

第9回いなかとまちの文化祭～ところを耕すくらしのマルシェを開催します。今回のテーマは「新しい風がふいている～地に足つけて生きる」です。

- 日時 | 2020年10月31日(土) 10:00~15:00※雨天決行・荒天中止
- 場所 | とよしば、ギャザ南広場
- 内容 | *いなかとまちのステージ* 里山の暮らしワークショップ*ところを耕すくらしのマルシェ* 森の体験ブース
- 主催 | いなかとまちの文化祭実行委員会(構成:(一社)おいでん・さんそん、株式会社こいけやクリエイト、その他個人有志)
- 協力 | 戸田新聞店、豊田まちづくり株式会社、愛知県交流居住センター、豊田市
- 問合せ先 | 実行委員会事務局(おいでん・さんそんセンターTEL: 0565-62-0610)



昨年度の様子

出店店舗などの最新情報は、[耕Lifeホームページ内特設ページ](http://www.kou-life.com/bunkasai/)で随時更新していきます。

www.kou-life.com/bunkasai/

- ※出店・出演者の内容は都合により変更になる場合がございます。
- ※ご来場の際はマスクを着用のうえ、手指のアルコール消毒をお願いいたします。

REPORT



豊田市山村地域移住への興味・関心、高まりの傾向

データが示す数字に注目してみる



東京都では緊急事態宣言が出ていた5月に比較可能な2013年7月以降で初めて転出超過となったというニュースを耳にされた方もいるかもしれません。内閣府が5月下旬から6月上旬に実施した調査では、東京圏に暮らす20代の約3割が地方移住への希望が「高くなった」か「やや高くなった」と回答しているそうです。

ここ豊田市でも、山村地域移住への関心が高まっていることを示すデータがあります。豊田市役所地域支援課の調べによると、山村地域移住情報バンクのホームページへのアクセス数(トップページの閲覧数)は2020年の4月から7月までで、11,436。昨年の同期間では7,013と、比較してみるとおよそ1.6倍となっています。また、同バンクへの利用者登録数は、2020年8月末の時点で77件。昨年度の年間実績数が112件なので、月平均してみると、多いことがわかります。

では、実際に同バンクを通じて移住した人の数はどうなのかというと8月末までで移住者数が27人、移住世帯が17世帯となっています(地域面談で入居が決定した件数、移住ではなく事業利用する件数も含む)。こちらも昨年度の年間実績数、移住者数67人、移住世帯25世帯と比較してみると増加傾向にあることがわかります。

地域支援課の担当者によると、「移住希望の高まりに比べて、空き家情報バンクへの登録数の伸びが少ないのが課題です」とのこと。所有する空き家をどうするか迷っている方は是非、この機会に相談してみませんか?当センターでも受け付けています。(木浦幸加)



コロナ禍でも途切れない関係性

今年度に入り、新型コロナウイルスの影響で、人と人が接触したり、集まることを避けなければならぬ事態が広がりました。センターとしては、集落活動応援隊の活動を、新型コロナウイルス感染症に配慮しながら引き続き実施することを決めたものの、集落側からの応援要請があるか、また隊員側から参加申込みがあるか不安を抱えながらの取組でした。

しかし毎回杞憂に終わり、両者から例年以上に積極的な申込みをいただいています。岩下町からも要請を受け、実施が決まりました。

回数を重ね

余裕のある環境美化

9月19日(土)の活動は、住民9名と応援隊7名が参加し行なわれました。草刈りをしたのは集落内の市道で延長700m、高低差60mの路側や法面の草刈り作業。参加した隊員には岩下町ファンの常連者も多く、慣れた様子で持ち場に分かれ手際よく作業が進み、1時間足らずで刈り終えました。

刈った草は集めて軽トラに積み、毎回きれいに片づけられ、住民の環境に対する美意識の高さを感じます。当初は手入れが行き届いておらず刈り終えるまでで精いっぱいでしたが、年2回の環境美化をきっちり行っている効果で、草の勢いも抑えられ、現在では予定時間内に余裕をもって終えることができています。

隊員、受入集落それぞれの想い

貴重な時間をボランティアに充てている方たちの心境はどんなものなのか。隊員にお話を聞くことができました。

今年で4年目となる松井博行さん(58歳・志賀町)は、参加の理由について、「いろいろな地域の方と接したくて最初は試しで参加してたんですがやみつきになってしまいました。毎回地元の方といろんなお話しができて、元気な顔を見られるのが楽しみです」と、住民と交流できることが参加の原動力になっていることを教えてくれました。

8年目の綾野忠司さん(65歳・大林町)は、「コロナ禍の状況ですが密になる活動ではないです



岩下町・町内会長の久木良夫(ひさなぎよしお)さん



応援隊4年目の松井博行(まついひろゆき)さん



応援隊8年目の綾野忠司(あやのただし)さん